

ほんのもり

中学生むき

(年 組 名 前)

平成28年7月6日発行
発行・編集 熊取図書館
編集・協力 学校図書館

「なりたて中学生 初級編」

ひこ・田中／著
講談社

中学入学直前、隣の学区に引っ越ししたばかりに、友だちが誰もいない中学校に入学することになったテツオ。へたレでお調子者のテツオが、新しい中学校での自分の立ち位置を探りながらの中学校生活を描いています。

中学生になる前の不安や小学校とは違う生活の様子など、テンポ良い関西弁で書かれている読みやすい物語。

つづきに「中級編」もあります。



「天と地の方程式」全3巻

富安 陽子／著
五十嵐 大介／画
講談社

夢の中で不思議な猿に「くるすの丘に來い」と言われた13歳のアレイ。直後に引っ越しが決まり、アレイは菜栖の丘学園に転校することになります。クラスメートはたったの三人。そのうちの一人は、数学の才能はバツグンですが、かなりの変わり者のQ。そんなQと一緒にアレイは、異空間に閉じ込められてしまいます。日本の神話をベースにしたファンタジーです。

「片目の青」

陣崎 草子／著
講談社



中学一年の真矢は、登山客でにぎわう千枚山のふもとに住んでいます。ある日、餓い犬のフリ蔵の散歩中に崖下に落ちてしまった真矢。その時、片目の犬をリーダーにした野犬の群れが現れ、遠吠えを始めます。その騒ぎで無事に救出された真矢。しかし、この事件をきっかけに野犬狩りの話が持ち上がります。狼のように誇りたかい野犬のリーダーを守りたい真矢は、個性豊かなクラスメートも巻き込み、野犬狩り阻止の計画を立てます。

「波のそこにも」

末吉 暁子／作
佐竹 美保／絵
偕成社

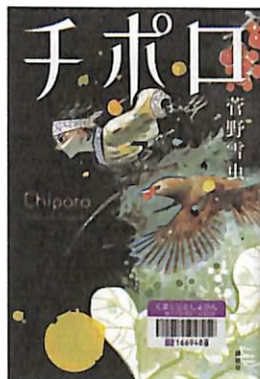
水底の国に住む少女タモオは、ある朝、上の国（人間界）から落ちてきた少年を見つける。上の国の皇子だと名乗る、その少年は、大切な宝剣をなくしてしまったらしい。そこでタモオは、少年とともに、友だちで水族の男ギョイ、いろこの宮の姫ウシオと、宝剣を探す旅に出る。

「水家物語」をモチーフにした、冒険ファンタジー。



「チポロ」

菅野 雪虫／著
講談社



神と人が共に暮らす時代。幼なじみのチポロとイレシュが暮らす集落に、ある日、魔物が現れイレシュをさらってしまいます。三年後、遠い北の地に心優しい氷の魔女がいるという噂をチポロは聞きます。「イレシュかもしれない」と思ったチポロは、ミソサザイの神とともに、イレシュを探す旅に出ます。



「岸辺のヤービ」

梨木 香歩／著
小沢 さかえ／画
福音館書店

ボート乗りが好きな教師の“私”は、岸辺で“ヤービ”という不思議な生物と出会い、仲良くなる。ヤービとの交流を深めながら、私は、彼の仲間や暮らし、冒険の話など、いろいろな話を聞く。

優しい時間が流れている物語の世界を楽しんでください。

「ロックウッド除霊探偵局 霊を呼ぶペンダント」上・下

ジョナサン・ストラウド／作
小学館

心霊現象が多発するロンドン。そのため、霊を封印し、除去することを専門にする会社、除霊探偵局が活躍している。

霊の声を聞きとる能力を持つ少女ルーシーが、ロックウッド局長の除霊探偵局で働くことになり、ロックウッドや仲間たちとともに、難事件に挑む！

つづきに、『ロックウッド人骨鏡の謎 上・下』があります。



「わたしの心のなか」

シャロン・M・ドレイパー／作
鈴木出版

脳性まひで親指しか動かせない少女メロディ。話すこともできない、一人でごはんも食べられない。頭の中では、たくさんの言葉が舞い降りてきて、いろんなことを考えているのに。

ある日、メロディは自分の代わりに、思っていることを声にしてくれるコンピューターを手に入れる。それを使ってメロディは、やっとクラスの人と話ができと思ったが……。自分のことをわかってもらえるうれしさなど、障がいを持つ少女の感情が素直に語られています。



「月にハミング」

マイケル・モーパーゴ／作
小学館

第一次世界大戦下、イギリスの南西部に位置し、人魚伝説の残るシリー諸島で、漁師の親子に保護された少女ルーシー。記憶をなくし、言葉も話さない彼女を保護したアルフィたち家族だが、ルーシーが敵国のドイツ人かもしれないという噂が広がり……。

豪華客船が撃沈された実話をベースに描かれ、戦争がいかにも無益なものか、人間を傷つけるものなのか訴えかけてくる。

「おいぼれミック」

バリ・ライ／著
あすなろ書房

インド系移民のハーヴェイの家族が引越した先の隣には、ミックというじいさんが住んでいた。しかし、そのじいさんは、とんでもない差別発言をする人間だった。様々なやがらせに腹を立てながらも、ハーヴェイ一家はおだやかに隣さんにつきあっていく。ある日、ミックがハーヴェイのクラスメートにからかわれている場面を見て……。重いテーマでありながら、ハーヴェイの正義感と熱意、ミックの飼犬を通して、心通わせていく様子など、読後感が心地良い物語。



「テオの「ありがとう」ノート」

クロディーヌ・ル・グイット＝プリエト／著
PHP 研究所

テオは生まれつき両足と左手に障がいがあるため、施設で車イス生活をしている。ある時テオは、何かを頼むたびに、自分は毎日どれだけ「ありがとう」を言っているんだろうということに気づく。そこで、「ありがとう」ということを一切やめ、その代わりに、何でも自分でやることにした。

「自分とは何?」、「自立するということとは?」など、障がいがあってもなくても、考えることではないでしょうか。テオが成長していく様子を見ながら、人を理解するという考えさせられます。



「マララとイクバル」 パキスタンのゆうかんな子どもたち」

ジャネット・ウィンター／作
岩崎書店

女の子が学校へ通う権利を訴え、ノーベル平和賞を受賞した少女マララと、児童労働に対して自分たちの自由を訴え続けていた少年イクバル。子どもでいながら、勇気を持って立ち向かっていった2人のそれぞれの物語が、絵本の前からと後ろから読み進めていくと、真ん中で2人が出会う。平和とは、自由とは何かを考えさせられる作品。

「リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険」

トーベン・クールマン／作
ブロンズ新社

知りたがりやのネズミが、何か月も図書館で本を読みふけて家に帰ってみると、誰もいない。みんなネズミとりがこわくて、逃げ出したんだ。そこで、ネズミは、空を飛んで仲間たちのいるアメリカへと行こうと考え、大きな翼を作ってみたりするのだが、なかなか上手くいかない。ズミは空を飛ぶことができるのだろうか。空を飛ぶことに憧れていたころの人間のように、いろいろなことに挑戦するネズミを応援したくなる物語です。



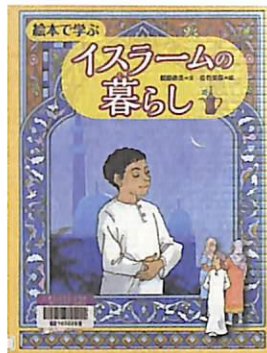
「ビブリオバトルハンドブック」

ビブリオバトル普及委員会／編著
子どもの未来社

ビブリオバトルとは、お気に入りの本を紹介し合うゲームです。

そもそも読書自体が内面的な活動なので、ゲーム？と思うかもしれませんが、でも自分が読んで面白かったと思う本のことを話すことで、日常会話では表せないような「自分」が表に出るのです。

「本を通して人を知る。人を通して本を知る。」ビブリオバトルは、それぞれの思いを表現することで、本の紹介を通したコミュニケーションの場をつくることができます。



「絵本で学ぶイスラームの暮らし」

松原 直美／文
佐竹 美保／絵
あすなろ書房

みなさんは、イスラームの人たちについて、どんなことを知っていますか？

髪をスカーフでおおった女性や、高い塔のあるモスク、豚肉を食べない…といったことでしょうか？日本で暮らしていると、イスラームの文化を身近に感じる機会はありませんのかもしれませんが、この絵本では、イスラームの基本的な教えや行事について、わかりやすく説明しています。イスラームの人たちの普段の暮らしにふれてみましょう。

「うさぎのヤスヒコ、憲法と出会う」

西原 博史／著
山中 正大／絵
太郎次郎社エディタス

サル山共和国に住むサルとリサ、ウサギのヤスヒコが身の回りで起きた事件や出来事を通して、法律や憲法について考えます。「法律」、「憲法」と聞くだけで難しく思うかもしれませんが、この本では人間社会の多数派をサル、少数派をウサギに置き換えて、なるべくわかりやすく教えてくれます。ニュースや新聞で取り上げられることが増えてきたこれらのテーマについて、もっと理解が深まるかもしれません。

☆「なるほどパワ」の法律講座」シリーズに、「おさるのトーマス、刑法を知る」、「リサとなかまたち、民法に挑む」があります。



「ランドセルは海を越えて」

内堀 タケシ／写真・文
ポプラ社

日本で使われなくなったランドセルを、アフガニスタンの子どもたちへ送る活動を紹介している写真絵本です。

ランドセルを手にした子どもたちの笑顔がとても印象的ですが、子どもたちが学校に行くことが当たり前ではなく、成長していくことさえも難しい国もあるのだということについて、考えさせられる1冊です。

「夢に出そうなミクロ生物」

ミクロ生物選定委員会／編
扶桑社

肉眼では見ることのできない、ミクロの世界に住む小さな小さな生物の写真集です。「こんな生きもの本当にいるの?」と思うようなびっくりさせられる姿ばかりですが、体長約0.4mm ダニや約1.5mm シラミなどを、走査型電子顕微鏡というもので拡大した写真なのです。人間の想像力を超えたミクロの世界を、こわいもの見たさでちょっとのぞいてみませんか?



走査型電子顕微鏡というもので拡大した写真なのです。人間の想像力を超えたミクロの世界を、こわいもの見たさでちょっとのぞいてみませんか?

「はじめての美術鑑賞」

ローシー・ディキンズ／作
あかね書房

「鑑賞」という言葉を聞くだけで、ニガテな気持ちになりそうですが、この本では、気軽に世界中の有名な絵画を見る楽しみ方を教えてくれます。

絵の中で見たら良いポイントを教えてくれるだけでなく、絵の中から何かを探し出したり、絵と同じように自分で描いてみたりなど、体験する楽しみ方もできる本です。

☆「みつけた! 名画の楽しみ方と描き方」シリーズに、『色でみつかる名画の秘密』、『世界の名画を読み解く』があります。



「大和言葉つかいかた図鑑」

野海 凧子／著
ニシワキ タダシ／絵
誠文堂新光社

「大和言葉」とは、昔、中国から漢字が入ってくる前から使われていた言葉です。カタカナ語ではない、漢字で書いた時、訓読できる言葉だからなのか、なんだか柔らかくて優しい響きをする言葉が多いのです。「たしなむ」、「ひたむき」など聞いたことある言葉から、「しおしおと」、「もっけのさいわい」など聞いたことも使ったこともない言葉までたくさん載っています。なごむイラストともにお気に入りの言葉を見つけてみましょう。

「ほんとうのじぶん」

石津 ちひろ／詩
加藤 久仁生／絵
理論社

いろんな季節、いろんな生きもの、いろんな食べもの、いろんな人、そしていろんな自分がここにいる。

自分が感じるいろんな空気や自分が感じるいろんないのち。

ありのままのほんとうのじぶんを感じることで表現している詩集です。

いまの自分と同じ気持ちの詩がみつかるかもしれません。



「坊っちゃん」

夏目 漱石／著
小学館

“親譲りの無鉄砲で子どものころから損ばかりしている”有名な冒頭の一節を聞いただけで、「坊っちゃん」のことを知っている人は多いのでは。

でも、昔の物語は読みにくいと思う人も多いかもしれませんが、この本は、難しい単語の意味やふりがなもついているので、初めて読む人におすすめです。

今年、漱石没後 100 年を記念して、『吾輩は猫である』などの新聞連載もされているので、一緒に読んでみませんか。



「十五少年漂流記」

ジュール・ヴェルヌ／著
新潮社

ニュージーランドの寄宿学校の生徒たちを乗せた帆船が、嵐の夜の海をくぐりぬけ、ある無人島に流れ着いた。8歳から14歳の15人の少年たちは、いつか来てくれる助けを信じ、力を合わせて島でのサバイバルを始める。

冒険小説の名作が、椎名誠さん(2年生国語の教科書に掲載『アイスプラネット』の作者)と彼の娘、渡部葉さんの訳で再び出版されました。言葉の違いも新しくなり、とても読みやすくなっています。